慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シマの話(佐喜眞興英著, 郷土研究社發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.3 (1925. 8) ,p.150(462)- 151(463)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250800-0151

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

獸などの話、或は民間信仰に關係ある流行神や犬神、或は長者物語等がある。風俗でも傳說でもその地方の民衆の生活の反映であり、民衆を理解する最も大切な要素である。けれども時代のすゝむとともにこれらは全く消滅したり、或は變化する。それ故この災禍を免れるためにはこれを記錄にとどめて保存せねばならぬのであつて、本書のごとき小册子とは言へ土俗研究には非常に貴重なる書と言はねばならぬ。

球球人名考（東恩納寬惇著　鄕土研究社發行）

本書もまた爐邊叢書の一册であつて、琉球における古文獻に見れたる人名をいかによむべきか、また後世のといかなる關係を有するかを研究せるものである。まづ一般氏名、卽ち姓及氏、家名、名乘、唐名、童名の研究より始めて童名の接頭美稱と接尾美稱としての附加語の種類をあげ、その性質を說明し、さうして童名の接頭語及び接尾語の附加具合によつて貴族、士族、平民の三階級を表示することをのべ、ついで各種の童名、組踊中の童名、古書に見れたる人名、『おもろ』及び傳說に見れたる人名をあげて說明し、また種々の王の神號をあげてその意味をさぐり、それが光耀の意を表はすもの、靈威崇高を表はすもの、偉大英雄を表はすもの主權を表はすもの、浮揚秀勝を表はすものであること、換言すれば稜威盛なる日神の御裔と云ふ抽象的絕對的讃意の外に、仁とか義とか云ふやうな批判的相對的思想を表現してゐないことをのべて、これによつて王權に對する觀念をみることができるとなし更に命名に關する慣行を說き、また貴族、士族、平民の階級制度と位階、並ひにその階級及び位階を表示する冠及び簪の起原や種類をのべ、最後に組踊中に見れたる位階組織を說いてゐる。かくのごとく各方面に亘つての研究であつて、ひろく古記錄類を引用し、いたるところ語源的解釋をほどこしてその原意を明かにしてゐる。琉球研究者に對してその蒙を啓くところは少くないであらう。

シマの話（佐喜眞興英著　鄕土研究社發行）

本書もまた爐邊叢書の一册であつて、沖繩島中部地方の新城（アラグスク）の島を中心とした土俗の研究である。本書に於けるシマは島の意味ではなくして、ロシアのミイルにすこぶる似た村落共產體の意味するところのもので、經濟上に於いても社會組織の上に於いても一の單位をなし、そこに發生したるシマ生活はそれぞれ特異なものであつた。本書に於いてはまづ『村落共產體としてのシマ』に於いてこの特異なシマの行政、社會的羈絆、結婚制度、自治警察制度、租稅、祭禮、娛樂等に關する說明をなし、以下島人の私有財產的法律關係、島人の家々、島人の被服、島人の飲食物、島人の年中行事、出生、性、病、死、死後、旅、島人の言葉遣及呼稱、トキ・ユタ及マジナイ、雜の項目の下にそれぞれの土俗學的研究をなしてゐるが、殊に注意すべきは、他でほとんど

亡びてしまつた日本の古語が、いまなほこの地方で完全に殘つてゐることで、單に言語といはず、信仰風習に於いても古代日本民族のそれを反映するものが多く、南島研究の重要なることを立證するものであつて、近時漸くさかんならんとしつゝあるこの方面の貴重なる收穫の一である。（以上三項、松本芳夫）

道教概說（小柳司氣太著　世界文庫刊行會發行）

支那の文化で古來我々に最も親しみがあり、從つて我々の文化的生活に最も著しい影響を及ぼせしものはいふまでもなく儒教である。實に儒教の思想は現在に至るまでなほ常に强大なる力を我我の生活に加へてゐるので爲めに我が國人はともすれば儒教の思想を以て支那思想の全班なるが如き誤謬、少くともその重要なるものなるが如き誤解に陷り易い傾向を有するのであるが、而も事實上儒教の思想を以て常に所謂支那思想の全部或はその重要なるものとして考ふべきでなく、却つて支那民族の眞の思想は道教の思想によりてより多く代表せられてゐる場合が多いのである。然るに我が學界に於ては古來餘りに儒教を尊崇せる結果、支那思想の研究は卽ち儒教思想の研究なるが如き錯誤に陷り、眞に支那民族を知る上に於てなほ一層重要なる道教の研究に至つては多く棄てゝ之を顧みず、而もその實際の支那を目擊するに及び、餘りにその期待に反するものあるに驚くのである。思はざるもまた甚しと云はなければなるまいと考へる。

然るに近時漸くその非を悟り、多少道教の研究に志すものを生じたやうで、例へば曩には妻木直良氏の論文「道教の研究」（東洋學報）などの發表を見たのであるが、その後小柳博士は飯島忠夫氏と協力し、世界聖典全集の一篇として「道教聖典」と名け、道教關係の書中抱朴子內篇、太上感應編等五種を撰びて國譯せられ學界の注目を引いたのである。而も博士の研究心はもとより之れを以て滿足すること能はず、更に進んで大に道教の研究に沒頭し以て古來我が國の學者が殆んど放棄して顧みなかつた、未到の荒野を開拓するに努力して居らるゝのである。而してその努力の一端として現はれたのは、卽ち世界文庫の一篇として著はされた「道教概說」である。もとより世界文庫の性質上紙數に著しい制限があり、僅かに百頁餘の小册子にまとめなければならないのであるから、到底十分なる解說を加ふる能はざることは云ふまでもないことで、既に博士自ら「道教概說は一册の著述といふよりも、寧ろ小論文ともいふべきものにして、道教のあらゆる問題につき、ただ其の要を提ぐるに止まりて、未だ玄を鉤せず、引いて之を伸べ類に觸れて之れを長ずることは、之を後日に期せり」といひ、すなはちその後哲學雜誌上に「道教と眞言密教との關係を論じて修驗道に及ぶ」といふ題下に、道教と我が國の修驗道との關係を論じ、博士が不斷の努力の一端を洩らされたのによりても、略々所謂「道教概說」の內容性質を察することが出來るのである。

要するに「道教概說」は博士が將來更に進んで努力考究せらるべき、道教研究の要目として認むべきものであり、從つてこの方